

---

# 仮面ライダー カブト TIME PARADOX

桂 ヒナギク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー カブト TIME PARADOX

### 【Zコード】

Z7280A

### 【作者名】

桂 ヒナギク

### 【あらすじ】

7年前、突如地球に飛来し、日本・渋谷に落下直撃した巨大隕石通称「シブヤ隕石」によって周囲地域は壊滅。隕石は人的にも多数の被害を与え、7年後の現在でも渋谷は復興されることも無く封鎖されている。だが、これらの災厄は終わった訳ではなく、すべての始まりにすぎなかつた。

## ++ プロローグ ++ (前書き)

このお話は、ファンフィクションとして私が勝手に書いてるもので  
す。同人誌に興味の無い方や、ファンフィクション否定派は読ま  
い方が良いかも。

## ++ プロローグ ++

7年前、突如地球に飛来し、日本・渋谷に落下直撃した巨大隕石  
通称「シブヤ隕石」によって周囲地域は壊滅。隕石は人  
的にも多数の被害を与え、7年後の現在でも渋谷は復興され  
ることも無く封鎖されている。だが、これらの災厄は終わつた訳ではなく、  
すべての始まりにすぎなかつた。

隕石落下直後より地球人類に擬態し街中を白昼堂々と活動、次々と  
人を殺しつつ繁殖する正体不明の宇宙生命体が人々に恐怖をもたら  
していた。「ワーム」と呼ばれるその生物を滅ぼすため、人類は秘  
密組織「ZECT」を結成。しかしワームのもつ、目にも留まらぬ  
高速移動能力「クロックアップ」の前に、ZECTは敗北を重ねる。  
もはや最後の希望は、完成間もない武装システム「マスクドライダ  
ー システム」のみであつた。これを装備し、使いこなせる者が現れ  
れば、ZECTはワームに対抗しうる力を手に入れられるのだ。

++ プロローグ ++ (後書き)

えっと、別のストーリーでまたやります。

## 第一話・選ばれし者（前書き）

第一回目、仮面ライダーカブト、「選ばれし者」をお楽しみ下さい。

## 第1話・選ばれし者

東京都渋谷区・・・。

此處に、一人の男が佇んでいた。

男の名は、加賀美 かがみ 新。

彼は、ワームに対抗すべく、人類が結成した秘密組織「ZECT」の隊員である。

加賀美が佇んでいると、

「加賀美君。」

と、一人の女性が声を掛けた。

女性の名は、岬 みさき 結月。

彼女もまた、彼と同様にZECTの隊員である。

そしてもう一人、この物語が進行する上で重要な人物が、高校生である主人公のこの俺、黒川 慎吾様だ。

「あ、岬さん。」

と、加賀美は言う。

「加賀美君、帰るわよ。」

「はい。」

二人は、壊滅した渋谷を離れると、帰路に着いた。

翌日、彼らは出勤をした。

「お前達、今日の仕事、分かつてるな?」

と、田所が言う。

「上野公園に出没するワームを殲滅。」

と、岬が言う。

「その通りだ。じゃあ行くぞ。」

田所はそう言って、上野公園に向けて車を発進させた。

上野公園に到着すると、加賀美と岬はワーム殲滅に備えて準備をす

る。

一方、主人公の俺様は、上野公園でジョギングをしていた。すると、最近世間を騒かしている、ワームとか言う奴と戦つてゐる人の人物を見かけた。

俺は暫くの間、そいつらの様子を見る事にした。  
「しました、もう弾が！」

加賀美は、弾を切らしてしまった。

「こつちもよ！」

岬も同様だった。

「俺、やってみます！」

「分かつたわ。早く戻つて来てちょうだい！」

「はい！」

加賀美は、そう返事をすると、持ち場を離れて車に戻つた。

「どうした加賀美！？」

田所が聞く。

「ベルト、取りに来たんです。」

「そうか。ならその箱を開けろ。」

田所は、加賀美の横にある箱を開ける様指示した。

加賀美はその箱を開けると、

「これがベルト……。」

と、呟いた。

「何をしている？さつさと行け！」

田所は加賀美にそう言った。

加賀美は、車を出ると、急いで持ち場に戻つた。

加賀美が戻つて来ると、岬はワームに捕まっていた。

「岬さん！？」

加賀美が叫ぶと、ワームはそれに気付き、岬を放した。

「良くも岬さんを！」

加賀美はそう言って、ベルトを腰に装着し、

「来い！カブトゼクター！」

と、右手を挙げながら叫んだ。

すると、カブトムシの格好をした赤い何かが空から飛んで来て、加賀美の前までやって来た。

加賀美は、それを掴もうとしたが、赤いカブトムシに避けられて掴み損ねてしまった。

加賀美を避けたカブトムシは、方向を変えて俺の所へ飛んでくる。俺はそれを掴み、

「選ばれし者は、俺だ！」

と、言って、

「変身。」

と、言いながらそいつを腰のベルトに装着し、それと同時にマスクドライバーに変身をした。

変身が完了すると、

「change！」

と、機械音が鳴る。

俺の存在に気付いたワームは、脱皮をしてサナギワームから成虫ワームへと進化を遂げた。

成虫へと進化したワームは、肉眼では捕らえられない超高速移動能力・クロックアップをし、俺に近付いて来た。

俺は、武器・カブトクナイガンを握ると、かろつじて見えるワームに、一発の弾を撃ち込んだ。

するとワームは、一発の銃弾を受け、後に跳ね返り、地面に叩き付けられた。

俺はその隙に、カブトクナイガンを連射した。

そして、連射攻撃を受けたワームはその場で爆発を起こして消滅した。

成虫ワームを倒した俺は、変身を解き、それと同時に腰のベルトに装着されていた真っ赤なカブトムシは、どこかへと飛び去つて行った。

「何なんだお前？」

と、俺に聞く加賀美。

「選ばれし者だ。」

俺はそう言って、去つて行く。

「待つて！」

と、岬 結月。

だが、俺は岬が止めるのを無視し、その場から立ち去つた。

## 第2話・VS高校教師

東京都立高等学校。

俺はこの学校に普段は通っている。

この学校は、日本では進学校と呼ばれる程有名で、偏差値がもの凄く高い。

が、この世界で優秀でN.O.・1の俺にしてみればこんな所に入るのにはチョロい訳で。

つてのはどうでも良くて、重要なのは、先日、この学校内で一人の女子生徒が何者かに殺害されたと言う事件だ。

キーンコーンカーンコーン

と、放課後の合図のチャイムを鳴らす。

すると、教室にいた生徒は、殆どが下校を始めた。原因は昨日の殺人事件だ。

残つたのは、俺を含めて四人。

一人は、霧島 真理と言う篠原 しほら 愛美 つぐみ にそつくりな背の小さい可愛い女の子。

彼女は、俺がこの世で最も大切に思つてゐる人間だ。

彼女に何かあれば、俺は直ぐに飛んでいくだろう。

二人目は、友人の狩屋 浩介。

彼は、昨日殺された被害者の彼氏だ。

三人目は、友人の榎原 さかきはる 真理絵。

彼女は、殺された被害者と仲が良かつた。

そして最後の四人目。

名は、黒田 哲夫。

黒田は、生まれてからこの18年間、彼女を持った事が一度も無い上、オカルト系で気味悪がつて女性が近寄らない、ことごとく女性に縁がない男だ。

まあ、これでも数少ない俺の友人（？）なんだが・・・。  
さて、紹介も終わつた所だし、一仕事するとしよう・・・。  
俺は鞄を持ち、扉の前まで行く。

すると、

「慎吾、待つて。」

と、真理が俺を止めた。

「何だ？」

「今日、一緒に帰ろう？」

「悪い。今日は駄目なんだ。」

「どうして？」

「やうなきやいけない事があるんだ。」

ほら、昨日女子生徒が図書室で何者かに殺されただろ。  
だから、俺はそれを調べに図書室へ寄る。」

俺は真理にそう言った。

「それならあたしも付き合つよ。」

真理はそう言った。

「邪魔すんなよ？」

俺はそう言つと、真理の同行を許可した。

俺達は、教室を出て図書室に行つた。

図書室に着くと、数人の警察がまだ捜査をしていた。

「お、来たか。」

と、刑事が一言。

刑事の名は、高岡 賢たかおか まさる。

彼は警視庁捜査一課で働く敏腕刑事だ。

そして俺は、そんな彼を手助けする探偵だ。

「高岡刑事、捜査の方は何処まで進んでる？」

「それが、全く手懸かりが掴めて無いんだ・・・。」

「死因は？」

「司法解剖の結果では、心臓を潰された事によるショック死だそ

だ。」

ショック死・・・。

「死亡推定時刻は何時だ?」

「昨日の午後6時30分頃だよ。」

6時30分。

「大体分かった。中に入ってくれ。」

俺がそう言うと、高岡刑事はkeep outの黄色いテープを持ち上げる。

俺はそのテープを潜つて中に入る。

それに続き、

「待つて慎吾。」

と、真理も入つてくる。

俺は、被害者の遺体があつたと言う本棚の前に移動した。

本棚の前に移動すると、警視庁捜査一課の高山警部が立つていた。

「来たか。」

「警部、何か見つかりましたか?」

俺はそう聞いたが、高岡が言った通り何も見つからなかつたらしい。

因みに、被害者の名は、金島恵。

「目撃者はいないんですか?」

「ああ、校内を回つて聞き込みをしたが、誰一人としていなかつたよ。」

ただ、殺される直前に被害者と会つた人物がいるんだ。君の担任だよ。」

警部はそう言った。

「どうも。」

俺はそう言って、会釈をすると、警部と別れて職員室に向かつた。職員室に着くと、

「失礼します。桃山先生、いますか?」

と、俺は聞いた。

すると、「何かしら?」

と、桃山が現れた。

「昨日の事について聞かして下さい。」

「昨日の事？ それって、金島さんの事かしら？」

「ええ。」

「そうね～。彼女と最後に会ったのは、殺される5分前かしら。」「5分前・・・。

「詳しい時間帯は覚えてますか？」

「確か、6：25頃だったわ。」

「その時、怪しい人物とかは見ましたか？」

「いいえ、見てないわ。」

「そうですか。ありがとうございます。」

「俺はそう言つて、桃山と別れた。」「ねえ、犯人解つた？」

「ねえ、犯人解つた？」

と、真理が聞いた。

それに対して俺は、

「ああ、解つた。」

と、答えた。

「え、誰？教えて。」

と、真理。

「嫌だ。」

「ケチ。」

「どうせ俺はケチだ。」

そう言い、俺は図書室に戻った。

「黒川君、どうした？」「

と、警部。

「担任の桃山についてなんですが、彼女に捜査状況を話しましたか？」

「いや、話してはいないぞ。」「？」

「死亡推定時刻は？」

「それも話していない。」「？」

「そうですか。」「？」

「そうですか。」「？」

俺は警部に礼を言つと、真理に桃山を屋上に連れてくる様頼んだ。

そして俺は、一人屋上に行き、桃山を待つた。

「黒三郎、一いは所じ乎んで、何の罪？」

「桃山先生。金島 恵さんを殺害したの、貴方ですね。」

え！？な、何を冗談に？」

先に、貴方にご詰願いた

「そうね。彼女と最後に会ったのは、殺される5分前かしら。」

詳しい時間帯は覚えてますか？

研究法の比較

「そ、それが一体何の証拠になるってのよ！？」

「そ、うだよ慎吾。私にも解る様に説明して。」

備に推理した事を真理に觸りやすく説明する

卷之三

「担任の桃山についてなんですが、彼女に捜査状況を話しましたか

?

「死」確立された。

「それも話していない!」

「 そ う で す か 」

卷之三

と、  
真理は納得する。

「ちょっと何なのよ？貴方、あたしを疑つてるのー？」

「はい、疑つてます。それに、犯人と警察しか知らない事、知つて  
らぬふうでござります。

俺が桃山にそう言うと、

「え、聞いたのよ。警察が喋つていのを。」  
と、言い返した。

「可を聞いたのですか？」

「死亡推定時刻よ。それで、最後に会ったのが、殺される5分前だつて解ったのよ。」

「それは何処で聞いたんですか？」

「図書館の前よ。」

「成る程。他には？」

「それだけかな？」

「何がよ？」

「図書室の前で警察が話した事。全部聞いていたんですね？」

「聞いてたわ。

「だとすると、矛盾しているんですよ・・・貴方の言つてる事が。」

「矛盾つて、何処が矛盾してるの?」

桃山は聞く。

「讀書也是人生的一部份。」

真元に先づく。身の内に言ふ。身の外に言ふ。身の内に言ふ。身の外に言ふ。

「死亡推定時刻よ。それで、最後に会つたのが、殺される5分前だつて解つたつて。

「それは何処で聞いたんですか？」

「図書室の前よ。」

「成る程。他には？」

「それだけよ。」

- - - - -

「その何処が矛盾してゐて詰つの?」

警察は、死亡推定時刻を喋る前に司法解剖の結果を話しているんですよ。

貴方が警察の話を最初から全部聞いていたのなら、司法解剖の結果を知らないのは明らかにおかしい！

貴方の証言は矛盾しています！」

決まった。後は自供をして頂くのを待つだけだ。

桃山は、

「ふふ。やつぱり、嘘は吐けないのね。」

と、苦笑しながら言つた。

「そ、う、よ。彼女を殺したのよ。」

「動機は何ですか？」

俺は聞く。

「口封じよ。」

桃山はそう言つた。

「口封じ？」

「あの子、見ちゃつたのよ。」

私が桃山を殺し、擬態をした所を。だから殺したのよ。」「擬態・・・ワームか？」

「お前、ワームだな。」

俺はそう言つた。

「そこまで知ってるんだ。それじゃあ生かしてはおけないわね。」

そう言つて、桃山は成虫ワームに姿を変えた。

それを見た真理は、

「キヤー！」

と、悲鳴をあげた。

「五月蠅い！」

ワームはそう言つて、口から長い舌を出し、真理に襲い掛かつた。

俺は、カブトゼクターを呼んだ。

ゼクターは、ワームの舌を切り落とし、俺の元へとやって来る。

俺はそれを掴み、

「変身。」

と、ゼクターをベルトに装着してマスクドライダーに変身をする。

変身が完了すると、

「chanage!」

と、機械音が鳴る。

俺は真理に、

「逃げる。」

と、言ったが、

「見てる・・・」

と、真理は言った。

「怪我しても知らないぜ。」

俺は真理にそう言って、カブトクナイガンでワームを攻撃。攻撃を受けたワームは、クロックアップをして、俺に近付く。

俺は直ぐに、

「キヤストオフ。」

と、ゼクターホーンを反対側に倒した。

すると、

「cast off」

と、機械音を鳴らし、マスクドアーマーが吹っ飛び、ライダーフォームになる。

「chanage beetle」

と、機械音を鳴らした。

ライダーフォームになつた俺は、

「クロックアップ。」

と、言つてベルトの右にあるボタンを押し、

「clock up」

と、機械音を鳴らしてクロックアップをする。

その瞬間、全ての時間の流れが遅くなる。

俺はその中で、ワームに攻撃を仕掛ける。

ワームは攻撃を受けつつ反撃をするが、俺は巧くそれを避けながら攻撃をする。

ワームは俺の攻撃を受けて怯んだ。

こうなつたらしめたもので、

「ワン、ツー、スリー」

と、俺はフルスロットルを順番に押していく、ゼクター ホーンを倒し、

「ライダー キック。」

と言つて、ゼクター ホーンをもう一度倒す。

すると、右足が燃え上がり、

「ルライダー キック」

の機械音と共に回し蹴りをワームにお見舞い。

ライダー キックを喰らつたワームは、爆発を起こして消滅。

ワームを倒した俺は、

「clock over」

と言つ機械音を鳴らしてクロックアップを解除する。

戦いの一部始終を見ていた真理は、

「え、今何が起つたの！？」

と、びっくりした様子で俺に言つた。

俺は変身を解き、

「化け物を倒した。」

と、真理に言つた。

「え、でも1秒も掛かつてないよ？」

そりやそうだ。

タキオン粒子を使って人間の目では知覚出来ないスピードで動いてたんだからな。

それから数分後、爆音を聞いた高岡刑事が駆けつけて、

「今何があつた！？」

と、俺達に聞いた。

俺は当然、

「何でも無い。」

と、言つて誤魔化した。

まあ、事実を言つた所で、誰も信じてはくれないだろう。

だから俺は敢えて誤魔化したのだ。

「 そ、う、か・・・ な、ら、良、い、ん、だ、が・・・ 。

それより、 い、つ、ち、に、桃、山、つ、て、言、つ、君、の、担、任、が、来、た、よ、ね、? 」

「 ぐ、は、つ、! 」

「 ど、う、答、え、れ、ば、良、い、ん、だ、? 」

「 取、り、敢、え、ず、

「 来、て、な、い、。 」

「 ど、う、答、え、て、お、け、ば、問、題、無、い、だ、う、つ、。 」

「 わ、う、か、見、間、違、い、か、 」

「 と、高、岡、刑、事、は、言、つ、た、。 」

「 そ、れ、じ、や、あ、黒、川、君、。 桃、山、見、か、け、た、ら、教、え、て、く、れ、。 」

「 ど、う、し、て、? 」

「 金、島、 惠、を、殺、し、た、の、が、桃、山、だ、か、ら、だ、。 」

高、岡、刑、事、は、そ、う、言、つ、て、屋、上、を、去、つ、て、行、つ、た、。  
警、察、は、搜、查、は、も、う、そ、こ、ま、で、進、ん、で、い、る、の、か、。  
で、も、こ、の、事、件、は、一、生、解、決、出、来、な、い、だ、う、な、。  
と、俺、は、思、つ、た、の、で、ある、・・・、。 」

後、日、 校、内、の、ゴ、ミ、捨、て、場、で、桃、山、の、遺、体、が、見、つ、か、り、 桃、山、は、金、島、 惠、  
を、殺、害、し、て、か、ら、自、殺、を、し、た、と、言、つ、事、で、事、件、は、片、づ、い、た、。  
ワ、ー、ム、さ、ん、・・・、隠、す、な、ら、見、つ、か、ら、ない、所、に、隠、せ、よ、。 」

## 第2話・V.S高校教師（後書き）

ついやってしまった推理。

最初、書いてて、推理物なのか、ライダーものなのか解らなくなつてた。

まあでも、こうこうのも面白くて良いか。

とある廃墟ビルから、東京都立高等学校の屋上を双眼鏡で見ている男がいる。

ふつゝ  
アイツが

男はそう咳くと、携帯電話を取りだした。

「カブトを見つけました。東京都立高等学校の生徒の中に紛れ込んでいました。」

電話の相手は、そう言つたきり、黙つてしまつた。

用を覚ました俺は、鳴つてゐる用覚まし時計を止め、トイレを済ま

そして、食事に向かう。

「うれしう」

と、俺はお袋に朝の挨拶をすると、

卷之二

と、お袋も挨拶をする。

「今、何になんか予定あるの?」

「眞理と遊んでいた。」

「セツ。じやあお母さん、出かけいやつから鍵持つてってね。」

「わいつてある。」

備はさうひとと食事を満喫せ鍵を持つて家を出る

# ピーンポン

と、インター ホーンを押す。

すると、

「はーい。」

と、真理が顔を出す。

「行こうぜ真理。」

俺は真理に言つ。

真理は、

「ちょっと待つて。」

と言つて、扉を閉めてしまった。

それから数分後、真理は再びドアを開けると、

「お待たせ。」

と言つて、制服姿で出て來た。

「遅えよ。」

俺はそう言つ真理に言つてやつたが、

「女の子はね、支度に時間が掛かるのよ。み

と、言い返されてしまった。

「それじゃ、行こうか。」

真理はそう言つた。

何処へ行くか？

それは、今流行のデートスポットだ。

そこは、縁結び公園と呼ばれており、そこでキスをした者は必ず結ばれると言つ噂のある公園だ。

俺達は今日、そこへ行こうと言つ事だ。

「また今日も現れるかな？

と、真理。

俺は、

「何が？」

と、聞く。

すると真理は、

「昨日の化け物みたいなの。」

「

と、言った。

「バーロ、そんな演技でもねえ事言つな！」

「嫌だ。だつて、慎吾が戦つてゐる所、見たいんだもん。」

「変わつてゐるよ。お前・・・。」

俺達がそんな事を話してると、縁結び公園に到着した。

縁結び公園に到着した俺達は、辺りが騒がしい事に気が付いた。

俺達は、人集ひとだかりに紛れ込み、奥まで行くと、ある光景を目の当たりにした。

遺体だ。体中、血だらけの女性の遺体だ。

「これつて・・・。」

真理が呟く。

俺は、遺体に近付き、遺体を調べた。

遺体は既に、死後硬直が始まつており、体温も下がつていた。

「皆さん、これは殺人です。」

警察が来るまで待機していて下さい。」

俺がそう言つと、

「殺人ですって！」

とか、

「嫌だ、怖いわ。」

とか、

「冗談じゃねえぜ！」

とか、色々な声が聞こえた。

が、俺は気にせずに警察を呼んだ。

それから数分後、現場に警察が駆けつけて來た。

「黒川君、まさか君がこんな所にいるとわね。」

と、高山警部が来て言つ。

あ、そう言えば・・・。

「高岡刑事は？」

「ああ、彼なら風邪で欠席だ。で、死因は？」

「失血死ですよ。」

俺はそう言つ。

警部は、確認の為に遺体を確認した。

「これは酷い！体中、血だらけじゃないか。」  
と、言つ。

その時だった。

「ぞいで下さい、NECCTの者です。」

と、手帳を見せながら、一人の女性と男性がやって来た。

岬 結月と加賀美 新だ。

「」苦労様です。」

と、警部は敬礼をする。

NECCT・・・一体何者なんだ？

岬は、遺体を確認すると、

「体中血だらけじゃない！」

と、警部と同じ事を言つ。

「岬さん。」

「何、加賀美君？」

「変ですよ、この遺体。」

加賀美はそう言つ。

「確かにそうね・・・。」

と、岬。

高山警部は、

「何か不審な点でも？」

と、岬に聞いた。

岬は、

「傷口がおかしいんです。これは人の手では出来ない事です。」  
と、言つた。

「と言つ事は、ワーム？」

と、加賀美。

流石プロ。

俺はこの一人に感心してしまった。

「加賀美君、ZECTカムを出して。」

「はい。」

加賀美は、そう返事をすると、「ZECTカム」を取りだした。ZECTカム・・・それは、ワームの熱反応をチェックする装置で、ワームには体温が無い為、これを使えば直ぐに見分けられる。岬は、それを受け取ると、人集りの中をそれで確認した。

「いた！」

岬はそう叫んだ。

岬は、

「貴方、ワームね。」

と、俺に向かつて言った。

「ちょ、ちょと待て！俺がワームだと！？」

と、俺は聞き返す。

「ZECTカムが反応してるのでよ。兎に角来なさい！」

と言つて、岬は俺を引っ張る。

そして、俺は車に乗せられ、ZECT本部へ連れて行かれ、取調室へと入れられた。

「貴方、自分が何をして此処に連れて来られたか。当然知つてるわよね？」

さあ？

「貴方は縁結び公園で人間を殺したのよ。」

「ちょ、ちょと待て！俺が人間を殺した？

何言つてんだよ！？訳分かんねえ！」

「とぼけたつて無駄よ。このZECTカムはワームにしか反応しないんだから。」

岬はそう言つ。

「だからさあ、俺が人殺しだとか、ワームだとか何訳の分からぬ事言つてんだよ！？」

第一、俺は人間だ！」

と、俺はワームである事を否定するが、

「いいえ、貴方はワームよ。」

と、雪は雪に切る。

「証拠はあんのかよ？」

俺はそう聞いた。

まあ、どうせ証拠は無いだろうけどな。

七、照一也。

「あるわ。付いてきて。」

と、雪は鳴りた。

卷之三

「比呂はアーティストが弾くことを最も重視するアーティスト。本物は比呂!」

眠ってるわ。  
」

そう言って、岬は靈安室のケースを順番に見て言った。

「黒川、黒川、黒川、黒川・・・あつた。」

岬はそう言って、黒川 慎吾と書かれたケースを開けた。

すると、そこには俺の遺体

「…アーリアの事だ…？」

と、俺は岬に聞く。

「見ての通り、一週間前に貴方がこの子を殺して擬態したのよ。」

「俺が殺して擬態した・・・。そんなの記憶に無い。」

俺は騙にそいつ言つてやつた。

「それじゃあこの薬を飲んで。

と、岬は錠剤の入った瓶を出した。

岬は、その瓶から1錠だけだと、俺にそれを渡した。

「もし貴方がワームでないのならば、それを飲んでも擬態が解けて

ワームになる事はないわ。

黙せやうだった。

「福原さん。それでなになかつた、おじいさんですかね？」

俺は『詰問女』に驚いたり喜んだりする。うう。

「罰」として貴方の奴隸として生きて行く

「鄙として貴方の奴隸として生きて行ってあげるわよ。」

岬はそう言ひ。

俺は、その錠剤を飲んだ。すると、俺の身体に変化が現れ、カブトムシがモチーフのワームに身体が変わってしまった。

「ど、どうなつてんだ俺の身体？」

俺がそう言ひと、顔をメットで隠し、スーツを着たアリがモチーフの格好をした小隊がやつて来て囲まれてしまった。

「お前ら何なんだよ！？」

と、俺が言つと、その中の一人がメットを外し、

「我々はワームを倒す為に作られたΖΕCΤの攻撃部隊シャドウだ。お前を抹殺する。」

と、言つた。

訳が分からなくなつた俺は、取り敢えずそこから逃げ出した。が、シャドウの部隊は、俺を追つて来る。

逃げ出してから暫くすると、薬の効果が切れ、人間の姿に戻つた。

「待て！」

と、メットを外した男が言ひ。

俺は、メットを外した男の言ひ通りに待つてやつた。

すると、メットを外した男は、右手を頭の上に伸ばした。

それと同時、蜂がモチーフのゼクターが男の元へ飛んできた。

男は、

「変身。」

と言い、左手首のブレスにセットし、マスクドライダーに変身をした。

やれやれ、面倒な奴だ。

俺は、カブトゼクターを呼び、

「変身。」

と言い、ベルトに装着してカブトに変身した。

「カブト！？」

ライダーは驚いて言つた。

俺はライダーに、

「ほお、俺を知つてるとはな。」

と、言った。

ライダーは、

「そのベルトはNECTが最近開発したもの。それを何処で手に入れた？」

と、聞いた。

それに対し俺は、

「このベルトとは長い付き合いでね。幼い頃に拾つたんだ。」

と、言った。

「拾つたか何だか知らないが、お前を倒す！」

と、ライダーは言って、俺に攻撃しようとした。

が、岬がやつて来て、

「矢車さん待つて！」

と、止めた。

ライダーは、

「どうしたんですか？」

と、岬に聞いた。

「私に話をさせて。」

岬はライダーにそう言つと、俺の方を向いた。

「貴方、3日前に上野公園で私と会わなかつたかしら？」

と、岬が聞いた。

俺は変身を解き、

「3日前？」

と、聞いた。

「そう。加賀美君がカブトゼクターを呼んで掴み損ねた日。

あの時変身したの、貴方？」

-----

「選ばれし者は、俺だ！」

と、言って、

「変身。」

と、言いながらそいつを腰のベルトに装着し、それと同時にマスクドライダーに変身をした。

そう言えば、そんな事があつた様な気がする・・・。

俺は頷き、

「会つたかも。」

と、言った。

すると、

「御免なさい！助けて貰つたのになんか事して、本当に御免なさい！」

と、岬は土下座をして謝つた。

「か、顔あげろよ。恥ずかしいだろ？」

岬は、

「そうね。」

と、顔をあげ、

「あなた達、もう良いわよ。」

と、シャドウに言った。

するヒシャドウは、洪々と帰つて行つた。

岬は、

「私、岬 結月。あの日からずっと貴方を捜していたわ。」

と、言った。

「あんた、俺を捜してたのか。」

つーか、ワームと言い、ZECTと言い、あんたら何者なんだ？」

俺がそう聞くと、岬は、7年前のシブヤ隕石の事、人々を殺し、擬態をして人間社会に浸透しているワームの事を話した。

「ほお、それで俺にZECTに入れと？」

「ええ。貴方が入ってくれれば心強いのよ。仕事上。」

「断る。あんな事された上に悪者扱い。そんな奴らがいる所になんか行きたくは無いね。」

俺はそう言つて断つた。

「まあ、何かあつたら此処に電話しな。」

そう言つて、俺の名刺を渡した。

「黒川 慎吾・・・探偵? 貴方、探偵なの! ?」

「何か問題でも?」

「いいえ、無いわ。」

何かあつたら電話するわ。じゃあね。」

そう言つて、岬は去つて行つた。

はあ、今日は色んな意味で疲れた。

早く家に帰つて寝よう。

そう思い、俺は帰路に着いた。

### 第3話・NECT（後書き）

カブト、戦わなかつたね。  
次回は戦わせたいと思います。

## 第4話・依頼（前書き）

主人公の慎吾、今回は天道並みの傲岸不遜振りを見せて います。

キーンコーンカーンコーン  
と、放課後を伝える合図が鳴り、教室から生徒は一斉にいなくなる。  
これも皆、世間を騒がせるワームとか言う奴のせいだ。  
残つたのは俺一人だけ。

俺は、一人教室で考え方をしていた。

すると、教室に先生が来て、

「黒川、早く帰れ。最近、化け物が彷徨さまよき始めて危ないんだから。」

と、言つたので、

「心配して言つてくれるのは嬉しいが、俺は平氣だ。」

と、先生に言い返した。

「何を呑氣な事言つてんだ。化け物に襲われたら死んじまうんだぞ。」

「ふつ、俺はその化け物に何度も襲われているが、こうしてちゃんと生きている。

と言つたが、もし現れたら俺がそいつを容赦無く殺す。」

「それは相当弱い化け物だつたんだなあ。」

と、先生は挑発氣味に言つ。

その時だつた。

俺の携帯が呼び出しをする。

俺は携帯を出すと、通話ボタンを押して、

「はい、黒川。」

と、応答する。

相手は岬だ。

「あ、岬さん。今日はどんなご用で?」

岬は、銀座でワームが暴れてると言つた。

「断る。そのぐらい自分で解決しろ。」

俺はそう言つて、強引にも電話を切つた。

何で断つたか？

それは、岬に自分でもやれば出来ると教えてやりたいからだ。

俺は先生に、

「さよなら。」

と言つて、教室を出る。

教室を出た俺は、下駄箱に向かい、靴を履いて外へ出る。

外へ出た俺は、校門に向かい、校門を通過する。

校門を通過した俺は、東京駅に行き、電車に乗つて銀座に行つた。

銀座に着いた俺は、真っ先に岬を捜した。

すると、岬が成虫ワームと戦つてゐる所を発見。

岬は、ワームに向かつて小型の銃を撃つてゐた。

小型と言つても、それなりの威力はある。人が喰らつたら一溜まりもない。

傲岸不遜な俺は、そんな岬をずっと見ていた。

「私だつて、やれば出来るのよ！」

と、岬はワームに向かつて銃を連射。

そして、遂にワームは爆発をして消滅。

「やつた！ワームを一人で倒したわ！」

岬は喜んでいた。

俺は側まで行き、

「ワームは？」

と、とぼける。

「遅いわよ黒川君。ワームはあたし一人で倒しちゃつたわ。」  
と、喜びながら言った。

が、実際は俺がカブトに変身し、クロツクアップをし、ワームにライダーキックをお見舞いして粉碎しただけなのだ。

やれやれ・・・全く、面白い奴だ。

「何だ、もう倒しちまつたのか。」

俺はそう言つて、岬と別れた。

岬と別れた俺は、銀座駅に向かい、電車に乗つて、東京駅で降りて

自宅に向かつて歩いている途中、俺は一匹の成虫ワームに襲われた。

「やれやれ。」

俺はそう言つと、カブトゼクターを呼び、

「変身。」

と言つて、ゼクターをベルトに装着し、カブトに変身をした。カブトに変身した俺は、直ぐにキャストオフをし、クロツクアップをした。

クロツクアップをした俺は、ワームにラッショウを掛けて怯ませ、ライダー・キックを放つてワームを粉碎。

ワームを倒した俺は、クロツクアップを解除し、変身を解くと、家路に着いた。

## 第5話・天道現る

ビストロ・ラ・サル。

俺は此処でアルバイトをして収入を得ている。

お、客人だ。

俺は、お客の前に行き、

「ご注文は何に致しますか？」

と、使いたくもない敬語を使って聞く。

客は、

「いつものだ。」

と、答えた。

「あの、いつものとは何でしょ？」

「お前、新入りか？」

「ええ、まあ。」

と、俺は答える。

すると客は、立ち上がり厨房へ入つて行く。

「待てよあんた。関係者以外立ち入り禁止だぞ。」

俺が客に言うと、

「放つておけ。」

と、ボクつ娘の田下部 ひよりが言った。

「何故だ？」

俺が聞くと、ひよりは、

「あいつは、偶に此処で料理を作るんだ。」

と、言つた。

「成る程、料理人か。」

納得した俺は、厨房に入つて様子を見た。

「どうした？」

と、客は聞く。

「あ、いや、何を作つてのかなって。」

俺はそう言つた。

「サバの味噌煮だ。美味しいぞ。食べるか？」

客はそう言つた。

「俺はお袋以外が作った飯を食つて美味しいと言つた事は無い。俺に美味しいと言わせる事がお前に出来るか？」

と、俺は無理難題を押しつける。

が、俺は客の作ったサバの味噌煮を食つて後悔をした。

「美味しい。」

俺がそう言つと、

「ふつ。」

と、笑つた。

その後、客はサバの味噌煮をたいらげ、サルを出て行つた。

俺は今の客の事をひよりに聞いた。

ひよりは、

「天道 総司。傲岸不遜な態度を取る男だ。」

と、言つた。

明ぐる日、俺は学校に向かつて歩いていた。

すると、成虫ワームが小さな女の子を襲おうとしてるのを発見。

俺は、

「待て。」

と、言つた。

ワームは、俺の声に反応すると、俺の方を向いた。

「お前の相手は俺だ。」

そう言つて、カブトゼクターを呼ぼうとした時。

どこからともなく、

「お婆ちゃんが言つていた。

子供は宝物。

この世で最も罪深いのは、その宝物を傷付ける者だ。」

と言つ天道の声が聞こえた。

天道は、ワームの前に来ると、俺の存在に気付き、

「お前が。助けてやるから逃げろ。」  
と、言った。

人間が生身どうするつもりだ。

そう思つて見えてると、天道の元にヘラクレスオオカブトをモチーフにした赤いゼクターが飛んできた。

天道はそれを掴むと、

「変身。」

と言つて、ベルトにゼクターを装着し、マスクドライダーへと変身した。

「成る程。だが、俺に助けはいらない。」

そう言つて、俺はゼクターを呼ぶと、それをベルトに装着してカブトに変身をした。

カブトに変身した俺は、キヤストオフをし、クロツクアップをした。そして、ワームにラツシユを喰らわせ、怯んだ隙にライダー・キックを放ち、ワームを粉碎。

それと同時に俺はクロツクアップが解除され、変身を解いた。天道も同じく変身を解くと、俺に声を掛けた。

「お前、資格者だったのか。」

と、天道。

「悪いか?」

「悪くは無い。だが、あまり人前で変身をしたりするな。NECTに入つてない者は狙われるぞ?」

「そう言う天道はどうなんだ?」

「入つていない。」

所で、何故俺の名を知つている?」

「ひよりから聞いた。」

「そうか。」

天道はそう言つと、何処かへ去つて行つた。

そして、俺はそのまま学校へと向かつた。

## 第5話・天道現る（後書き）

今思つてみると、慎吾も天道も傲岸不遜だな。

## 第6話・学園祭でワーム

俺こと黒川 慎吾は、真理と一緒に真理の中学校の時の友達の高校の学園祭に来ていた。

校内には、各クラス毎に出し物をやっている。

中には、俺の好きな推理物もあった。

「慎吾。」

真理が俺を呼ぶ。

「何だ?」

「3Aのクラスに行つてみない? あたしの友達がやっているんだ。」「どんな出し物をやっているんだ?」

俺は真理に聞く。

「マジックだよ。」

「ほお、それは楽しそうだ。」

と言ひ訳で、俺達は3Aのクラスへ行くことにした。

3Aのクラスへ入ると、

「いらっしゃいませ。」

と、生徒がお辞儀をする。

真理は、お友達を捜した。

「あ、いたいた。おーい。」

真理は、お友達を呼ぶ。

お友達は、真理に気付くと、俺達の元へ寄ってきた。

「やあ、真理。久しぶり。元気だつたあ?」

「うん、元気だよ。あ、紹介するね。」

彼女は、遠藤 美佐。私の中学の頃の親友なんだ。」

遠藤は、飯田 里穂に似ていて割と可愛かった。

「初めてまして、遠藤 美佐です。宜しくお願ひします。」

と、遠藤は自己紹介をしながらお辞儀をした。

「黒川 慎吾だ。」

「あの、ひょっとして、黒川さんて俺様系？」

唐突な質問だ。

しかも一発で当てやがった。

「美佐、駄目よそんな事言ひや。」

と、真理。

「良いよ、気にしてねえから。」

と、俺は言つ。

「黒川さんて、優しいんですね。ハッキリ言つて、私のタイプだわ。ねえ、今度、私とお食事しない？」

あの、それはお誘いですか？

「ちょっと美佐？」

「何、冗談よ。じょ・う・だ・ん。」

いや、マジに聞こえるぞ？

「それより美佐、マジック見せてよ。」

「OK！」

そう言つと、美佐はトランプを出し、シャッフルをすると、ファンをした。

「黒川さん、一枚引いて下さい。」

俺は言われた通りに一枚引いた。

「それでは、それを誰にも見せずに自分だけ見て下さい。」

俺は、誰にも見せず、自分だけそれを見た。

ハートの3だつた。

「それじゃあ、それを戻して下さい。」

俺はそれを見えない様にそれを戻した。

「それでは、シャッフルをして下さい。」

俺はトランプを受け取ると、シャッフルをしてから美佐に返した。

「では、このトランプから一枚だけカードを抜き取ります。」

美佐はそう言つて、トランプを横にすると、一枚だけを抜き出した。

美佐はそれを見て、

「貴方が引いたカードは、ハートの3ですね？」

と言つて、俺の方へ回転させた。

「すげえ！」

俺は驚くと、真っ先に全てのトランプを調べた。が、怪しい所は特に見あたらなかつた・・・。

いや、待てよ。このトランプ、形が少し変だ。

そうか、解つたぞ！ テーパード加工をしてあるんだ。

俺は仕掛けが解ると、

「ぬるいな。

と、言つてやつた。

「え？」

と、美佐。

「ふつ、こんな子供騙し、誰も引っ掛かるまい。俺がもつと凄いの見せてやる。」

そう言つて、俺はバツと空の手からトランプを出現させ、トランプを箱から出した。

「美佐さん、シャツフルして、一枚好きなカード選んで下さー。」

そう言つて、美佐にトランプを渡す。

美佐は、カードをシャツフルすると、一枚だけ引いた。

「それでは、それを覚えて下さい。」

美佐はそのカードを覚えた。

因みに、覚えたのはクラブの5だ。

「良いですか？ 今からカードをバラバラと落とすので、好きなところでストップをかけて下さい。」

俺は、そう言つと、右手でトランプをバラバラと左手に落として行つた。

「ストップ！」

美佐は、真ん中辺りまで来ると、そう言つた。

「はい。では、こちらの上にそれを置いて下さい。」

そう言つて、左手を美佐に突き出す。

美佐はトランプをそこに置いた。

「はい。では、残りのカードを上に乗せて、間に入れてしまこます。

「そう言って、俺は残りのカードを重ねた。  
と、見せかけてカバー・パスを行つた。

「真ん中に入つてますね？」

俺は美佐に確認する。

美佐は、

「入つてる！」

と、言つた。

「では、今から指を鳴らすと、選んだカードが上に上がつて来ます。

「そう言つて、俺は指をスナップさせ、一番上のカードを一枚同時に  
ずらせない様にめくつた。

すると美佐は、

「嘘！？どうやつたの！？」

と、驚いた。

「では、もう一度やります。」

と、言つて一枚同時にひっくり返し、上の一枚だけを間に入れて、  
指をスナップをし、一番上のクラブの5をめくる。

「凄い・・・。どうやつたの？」

美佐は俺に聞く。

「それは、教えられないです。」

と、俺は美佐に言つた。

「そないな事言わんと、ウチに教えてえな。  
と、美佐。

「2,000円でじうだ？」

「高！」

「1,500円。」

「もつと安く。」

「1,000円。」それ以下は無理だぞ。」

「じゃあ良い。」「

美佐は諦めた。

「じゃあ、またね。」

と、真理は言い、俺達は美佐と別れた。  
美佐と別れ、廊下に出た俺達は、隣のクラス3Bがやつてお化け屋敷に入った。

のは良いが、全然怖くなく、つまらなかつた。  
3Bから廊下に出た俺達は、次に推理劇を見に行く為に体育館へと向かつた。

体育館に着くと、俺達は開いている席に座つて始まるのをまつた。  
それから程なくして、推理劇が始まった。  
俺達は、それをワクワクしながら見ていた。  
そして50分、漸く劇も終盤に入り、やがて事件が解決し、推理劇が終了した。

「面白かつたね。」「

と、真理。

「そりか？俺的には面白くは無かつたぞ。  
推理にも若干矛盾があつたしな。」

「ふうん。」

「な、何だよそれ。」「

「別に。」「

と、真理。

「さ、そろそろ帰ろつか？」「

真理はそう言つた。

「そうだな。」「

こうして俺達は、帰ることになつた。

俺達は、校門の前まで來た。

すると、

「ちょっと待つて。」「

と、美佐がやつて來た。

「どうしたの美佐？」

真理は聞く。

「ちょっととこっち来て。」

と、真理を引っ張つて行く。

「待てよ。」

と、俺は言つたが、

「女同士の話。直ぐ戻るから待つてて。」

と、美佐は言う。

美佐は、真理を人気の無い路地へ連れて行つた。

「で、話つて何？」

真理は美佐に聞く。

「ねえ真理、凄い力・・・手に入れて見ない？」

「凄い力？」

真理は疑問に思つて聞く。

すると美佐は、

「おいで。」

と言つた。

すると、緑色のサンガリームが美佐の横に降り立つ。

「な、何なの？」

と、真理。

「真理、あたしの仲間が、真理に擬態したいって。」

と、美佐が真理に言う。

「擬態？」

「そう。貴方は一度死んで、ワームの中で生きる。生まれ変わるので。」

美佐はそう言つた。

が、一部始終を見ていた俺は、

「待て。俺を差し置いて、そんな話、勝手にしてんじゃねえよ。」

と、美佐に言う。

「何なのよ貴方？」

真理が生まれ変わるの、邪魔する気?」

と、美佐。

「生まれ変わり? 何がだ?」

お前らワームは自分勝手に人を殺し、擬態をして人間社会に浸透してるだけじゃねえか。

そんな事、人間は誰も望んじゃいねえよ。」

と、俺は美佐に言つ。

「そうとは限らないわよ?」

「え?」

「美佐はね、自分からワームの中で生きる事を望んだのよ。

そんな人たちの心を、貴方は踏みにじる訳?」

と、美佐は言つて、

「良いわ。貴方を先にワームにしてあげましょ。」

と、付け足し、もう一匹のサナギワームを美佐は呼んだ。

サナギワームは俺に擬態をし、美佐は成虫ワームへと姿を変える。成虫ワームに姿を変えた美佐は、口から長い舌を出して俺を攻撃して來た。

が、俺はカブトゼクターを呼び、その攻撃をゼクターで防御した。

「お前らしい加減しろよ。」

そう言つて、俺は飛んでいるゼクターを掴み、

「変身。」

と言つて、ベルトに装着し、カブト・マスクドフォームに変身する。

変身を遂げた俺は、俺に擬態しているワームをカブトクナイガンで撃ち殺して消滅させ、もう一匹のサナギワームもカブトクナイガンで撃ち殺して消滅させた。

すると、成虫ワームは俺を攻撃して來た。

俺は攻撃を受け後に退く。

が、反撃はしなかった。

俺がジツとしていると、ワームはもう一度攻撃して来る。

今度は、俺はその場に倒れたが、だるまの様に起きあがつたが、反撃はしない。

そんな俺を見ていた真理は、

「どうして戦わないの！？」

と、俺に聞く。

「戦えねえよ！お前の同意が無きや。」

「どういう事？」「

「真理、これはお前の戦いだ。

お前自身が、美佐をワームから救いたいと思わなければ、意味が無いんだ。」

俺は真理に言つてやつたが、

「でも・・・。」

と、真理は躊躇つた。

そこで俺は、

「親父が言つていた。

人は人を愛すると弱くなる・・・けど、恥ずかしがる事はない。  
それは本当の弱さじゃないから。」

と、真理に言つてやつた。

真理は一息吐くと、

「お願い慎吾！..」

と、言つた。

「良いのか？」

「構わない。」

俺は、真理の気持ちを素直に受け取ると、成虫ワームに反撃をする。反撃を受けたワームは、クロックアップをして俺に接近。

「キヤストオフ。」

俺はそう言つて、ゼクターホーンを倒し、

「cast off!」

と、機械音を鳴らしながらアーマーを弾き飛ばした。

弾け飛んだアーマーは、近付いてくるワームに当たつて怯ませた。

俺がライダーフォームになると、

「chan ge beet le」

と、キャストオフ完了の機械音が鳴った。

「クロックアップ。」

そう言つて、俺はベルトの右のボタンを押し、「clock up」

と、機械音を鳴らしてクロックアップをする。それに対し、ワームもクロックアップをする。俺は、ワームに近付き攻撃。

攻撃を受けたワームは反撃をするが、俺は巧くそれを避けて攻撃し、怯んだ所でラッシュを掛ける。

ラッシュを受けたワームは、身動きが取れなくなる。その後、俺はワームを軽く蹴り飛ばし、

「ワン、ツー、スリー」

と、フルスロットルを順番に押して行き、ゼクターホーンを倒し、「ライダー キック。」

と言つて、もう一度ゼクター ホーンを倒す。

そして、

「ルライダーキック」

の機械音と共に、ワームに回し蹴りを叩き込む。

その瞬間、ワームは爆発を起こし消滅。

「clock over」

と、機械音が鳴り、クロックアップが解除される。俺がワームを倒すと、

「ありがとう。」

と、真理が泣きながらライダーフォームの俺に抱きつぐ。俺は変身解き、

「真理・・・強くなつたな。」

と言つて、真理を抱きしめた。

## 第6話・学園祭でワーム（後書き）

読者の方々は、旧友がワームだったらどうします？  
今回の真理みたいになれますか？

## 第7話・罪人狙い

真夜中。東京のとある細道。辺りには何も無い。

「へつ！ チヨロイもんだぜ！」

と、大きな袋を背負つて走つている男がいた。

男が、何も無い細道を走つていると、目の前に何者が現れた。男は驚いた。自分と同じ姿をした人物が目の前にいたからだ。目の前の男は、笑いながら、成虫ワームへと姿を変える。

「た、助けて～！」

と、男は叫びながら逃げ出す。

が、ワームは男の前に先回りをし、口から毒液を吐いた。

毒液が掛かった男は、苦しみながらその場に倒れ、亡くなつてしまつた。

それから暫くして、これと似た様な事件が相次いで多発した。

警察の捜査で分かった事は、被害者には共通点があり、その共通点と言つのが全て、窃盗、恐喝、殺人と、必ず悪い事をしていると言う事だ。

俺は、この事件に興味を持ち、一人で捜査を始めた。が、全く持つて進展が無い。

こうなつたら、捜査方法を囮捜査おとりそうさに切り替えるか。

そう思つた俺は、NEC本部に行き、岬に会つた。

「あら。何か用？」

「岬さん。大至急頼まれて欲しい事がある。」

「何かしら？」

「最近、罪人が殺されると言つ事件が相次いで多発している・・・。俺は、その事件を調べているんだが、ワームが関与しているんじゃ

ないかと思う。」

「それで？ この私に何をしろと？」

「囮だ。」

「囮？」

「ああ。」

俺はそう言つて、岬に囮捜査の協力を要請した。

岬は、

「良いわよ。」

と、やりたそくに言つた。

「そうか。なら今夜決行だ。」

俺はそう言つて、

「東京駅の前にある宝石店で強盗をして来てくれ。勿論、店員には事前に連絡が行つてゐる。」

と、付け足した。

「え？ でもそれじゃあ、掛からないんじゃない？」

「ニユースに取り上げる。そうすれば絶対来る筈だ。」

こうして、俺と岬は今夜、罠を張ることにした。

夜中・・・。

岬が宝石店の前に金属バットを持つてやつて來た。

俺は無線を使い、

「慎重に行け。」

と、岬に言つた。

岬は、

「了解。」

とだけ言つて、店内に侵入した。

店内に侵入した岬は、宝石の置いてあるガラスケースを片つ端から破壊していく。

すると、警報ブザーが鳴り、セキュリティーシステムが作動し、岬の行動を監視カメラが捕らえ、それをセキュリティー会社に映像として送る。

その間、岬はありつたけの宝石を袋に詰めて行く。

そして、全て詰め終わると、岬は宝石店から逃げ出した。

それから暫くして、通報を受けた警察共が宝石店に駆けつけて来た。が、時既に遅く、岬はもうそこにはいなかつた。

その後、岬が行つた事はニュースになり、瞬く間に世間に広がつた。

翌朝、俺は岬に会いに行つた。

「岬さん、あれから変わつた事は？」

「いいえ。無いわ。」

「そうですか。」

と、そこへ加賀美が出勤して來た。

「お客さん？」

と、加賀美。

「黒川だ。」

俺がそう言つと、

「何、この天道みたいな奴。」

と、岬の耳元で小さい声で聞く。

「聞こえてるぞ。」

加賀美は驚き、

「地獄耳。」

と、小さく聞こえない様に言つた。

「地獄耳で悪かつたな。」

加賀美は更に驚いた。

「駄目よ。彼を怒らしたら。」

と、岬が加賀美に言つ。

「そ、そんなにやばいんですかコイツ。」

「コイツじやない。俺様だ。」

「何なんだよ・・・。」

と、加賀美は呟いた。

が、加賀美は無視され、俺と岬の話が続く。

「じゃ、そろそろ出歩いてみるか・・・。」

岬さん、車降りてその辺をぐるっと一週して来てくれ。」

「分かつたわ。」

岬はそう言つと、車を降りて歩いて行つた。

「なあ。お前、何がしたいんだ？」

と、加賀美が聞く。

「N e e d n o t k n o w . ( 知る必要の無い事だ。 ) 」  
「そう言つて、俺は答えなかつた。

「英語だよなそれ。どういう意味なんだ？」

と、加賀美。

「知る必要の無い事だ。」

「そんな事言わずに教えてくれよ。」

「コイツ・・・バカ？

説明してやるか？

「N e e d n o t k n o w .

日本語で、知る必要の無い事つて意味だ。」

「違う。意味なんか聞いていない。」

岬さんとお前は何がしたいのか。それを聞いてるんだ。  
ぐはっ！これでは、俺がバカみてえじゃねえか。

「お前には教えない。」

俺はそう言つて断つた。

「教える。」

「嫌だ。」

「教える。」

「なら俺に敬意を払え。」

「何でそうなるんだよ？つーかお前、目上の人に対しての言葉の使  
い方、少し弁えた方が良い。」

と、加賀美は傲岸不遜の俺に注意するが、

「俺は世界一だ。」

と、言い返してやつた。

するとその時、

「コンコン」

と、誰かが車の窓ガラスを叩いた。

俺と加賀美が確認すると、カブトゼクターが羽を羽ばたかせて飛んでいた。

「カブトゼクター！？」

と、加賀美。

「遂に俺を選んだか！」

加賀美は勘違いをしつつ喜んでいた。

「来た様だな。」

俺はそう呟くと、車を降りて岬の所へ行つた。

俺が行くと岬は、成虫ワームに胸ぐらを掴まれていた。

「待て。お前の相手は俺だ。」

俺はワームにそう言つた。

すると、ワームは俺に気付き、岬の胸倉を放した。

俺は、カブトゼクターを掴み、

「変身。」

と言つて、ベルトにセットしてカブト・マスクドフォームに変身した。

「キャストオフ。」

そう言つて俺はゼクターーホーンを反対に倒してキャストオフをし、

「cast off . . . change beetle」

と言つ機械音を鳴らしてライダーフォームになつた。

ライダーフォームになつた俺は、クロックアップをし、ワームに近付き攻撃。

攻撃を受けたワームは反撃をして來たが、俺はそれを巧く避けてラッショを掛け、怯んだ隙にライダーキックをお見舞い。

ライダーキックを受けたワームは、爆発をして消滅する。

その後、

「clock over」

と、俺はクロックアップが解除されると変身を解き、

「岬さん。お怪我は？」

と、聞いた。

岬は、

「大丈夫。」

と言って車に戻った。

岬と別れた俺は家路に着いた。

## 第7話・罪人狙い（後書き）

こんなワームがいてくれたら世の中は平和なのに・・・いや、逆に危ないか（苦笑）

## 第8話・クッシー（前書き）

今回は北海道釧路市にある屈斜路湖が舞台なんです。

## 第8話・クッシー

夏休み・・・。

俺は真理と北海道に旅行へ来ていた。

当初は、俺一人で行くつもりだったが、真理がどうしても行きたいと言つので連れていく事にした。

そして俺達は今、釧路にいる・・・。真理が屈斜路湖のクッシーが見たいと言つたからである。

俺は、

「そんなの作り話だつて。」

と、真理に言つたが、

「いや、絶対いる！」

と、真理は言い切る。

「じゃあこうしよう。

俺はいない方に掛ける。もしいなかつたら蟹をおごれ。」

「良いわよ。その代わり、もしいたら貴方がおじるのよ。」

と言つ訳で、俺達は蟹を掛けてクッシーの存在を確認する事になった。

俺は当然、クッシーなんて存在しないと思つていた。あの時までは・・・。

え？クッシーって何だと？

良いだろう。説明してやる。

クッシーとは、北海道釧路市の釧路湖の伝説に出てくる怪獣の事だ。

日本では、イッキーと並んで湖に棲む水棲獣として有名だ。

同湖には、昔から何か巨大な生物がいると伝えられている。

アイヌの伝説にも、月一回恋人同士を離れ島まで運んでくれる巨大なヘビの伝説がある。

地元では「クッシーを守る会」と言つ地元の有志が集まつて結成された会もあると言つ。

1974年9月から1ヶ月間の間 北海道放送は湖面にテレビカメラをセットし、ダイバーも潜らせ大掛かりな調査をした。その結果、200ミリの望遠レンズが丸い物体を捉えた。

また、主な目撃例がある。

1972年、雑貨商の小浜氏が、国道を車で走っている時に、ボートを逆さまにしたような物体が湖を移動しているのを目撃。

1973年、遠足にやって来た北中学の学生約40人が湖面を移動する巨大な物体を目撃

1974年、雑貨商の小浜氏が、湖面を猛スピードで移動している巨大な物体をカメラで撮影

同年7月、地元の農業を営む和田さん一家が、湖面に約4m間隔で黒いコブを発見。

そのコブは、和琴半島付近に急に移動し、大きな水音をたてて水中に消えた。

同年9月、地元レストランの支配人片岡氏と、店のお客さんが100m先の湖面に、黒っぽい三角形のコブを2つ目撃。そのコブの全長は、10~15mくらいで、モーター舟艇くらいのスピードで右から左に湖面を移動。

その様子を湖畔に居あわせた15人ほども目撃していた。

同じく、地元の北海道放送が一ヶ月間クッキー探査を行った。

湖岸にTVカメラを設置し、湖にはダイバーも潜らせ探索を実施。その結果、湖面に浮かぶ丸い物体のような物を捉えた。

また、魚群探知機には水深20m付近に体長15mの謎の物体をキヤツチした。

1975年、地元の林業をしている富原氏は湖畔で馬を使って木の切りだし作業を行っていた。

すると、作業をしている馬が急に暴れだし、富原氏は湖面の方に茶褐色の物体があるのを発見した。

その物体は馬の頭よりも大きく、アニメのおばちゃんのような形をしていて、目のような物がついていた、その目は銀色をしていたそうだ。

その内、その物体は水中へと消えて言ったといつ。

1976年5月26日、観光バスの運転手が湖面に巨大な生物を目撃。

1977年8月20日、観光バスの運転手とそのバスに乗っていた乗客22人がクツシーらしき生物を目撃。

1979年、札幌市の会社員一家が湖面を移動するクツシーらしき物体をカメラで撮影。

なんと、こんなにもあるではないか。

因みに、クツシーの名は、イギリスのネス湖のネッシーにちなんで名付けられたと言われている。

「慎吾、此処に貸しボートがあるよ。」

と、真理が言つ。

「これ借りて探そうよ。」

そう言つて、真理は貸しボート屋に向かつた。

「早く早く。」

全く、人騒がせな奴だ・・・。

俺は、貸しボート屋から手漕ぎボートを一艘1・200円で借りた。

俺は真理とボートに乗り込むと、ボートを漕ぎ始める。

それから暫くして、湖の中間地点までやつて來た。

「噂によると、この辺の様だぞ。」

俺は真理にそう言つた。

「私、絶対に見るからね。」

と、真理は言つ。

それから待つこと5時間。

それらしき物体は一向に姿を現さない。

「出で来ねえじやねえかよ。罰として蟹、おこりな。」

と、俺が言つたその時だつた。

水中から体調15m以上もある謎の物体が浮上して來た。

ボートは浮上して來た物体の影響で粉々になつてしまつた。

「た、助けて。溺れちゃう！」

と、真理・・・。

俺は、溺れ掛けている真理を助けながらも、その物体を確認した。その物体は、フタバスズキリュウの様な格好をしていて首がもの凄く長かつた。

「これが、クツシー・・・。」

と、俺は呟いた。

「ね、本当にいたでしょ！」

と、嬉しそうな真理。

「俺の負けだ。約束通り蟹をおじつてやる。」

と、俺が真理に言つと、クツシーがいきなり襲いかかつて來た。

クツシーは、口を開けると、俺達を一飲み。

飲み込まれた俺達は、クツシーの食堂を通つて胃袋まで辿り着いた。

「私達、どうなるのかな？」

と、真理が心配な表情で言つ。

「さあな。兎に角、此処から出る方法を探さないと。」

俺はそう言つた。

とは言つたものの、体内から抜け出す事など、死んで排出物になるか、吐いて貰うかしないと不可能だ。

俺がそんな事を考えてると、カブトゼクターがジョウントをしてやつて來た。

成る程、そう言つ事か。

俺はゼクターを掴み、それをベルトにセットしてカブト・マスクドフォームに変身をした。

「どうするの？」

と、真理。

「じつするのやー。」

俺はそう言つて、真理を抱きかかえると、勢いを付けてジャンプをした。

ジャンプをした俺は、胃から食堂へ入り、更に上昇をしてクツシーの口元まで行つた。

クッサーの口まで来ると、俺はカブトクナイガンでクッサーの歯を切り裂き、クッサーの口から外の世界へ飛び出した。

そして、空中でキャストオフをしてライダーフォームになり、落下して行く。

俺は落下しながらライダーキックを発動させ、クッサーの田の前まで来ると、クッサーに回し蹴りをお見舞いしてやつた。

ライダーキックを受けたクッサーは、大爆発を起こして消滅。

爆風を受けた俺達は、屈斜路湖の貸しボート屋まで吹き飛ばされた。吹き飛ばされた俺は、巧く体制を立て直すと、地面に着地をして変身を解いた。

「クッサー。いなくなっちゃったね。」

と、真理・・・。

「うん。でも、いなくなつて良かつたんじゃないかな？  
それに、あんな獰猛な怪物がいたら皆が危険だろ。そつそつ意味では、倒さなきやいけない存在なんだよ。」

「そうだね。」

「そんじゃあ、蟹でも食べて帰るか。」

そつそつて、俺達は屈斜路湖を後にした。

## 第8話・クッキー（後書き）

実際にこんな獰猛な怪獣がいたら困りますね。所で、今回のお話はどうだったでしょうか？

## 第9話：友達

東京都渋谷区・・・。

俺は一人、シブヤ隕石が落ちた所にいた。  
辺りは瓦礫の海で何も無い。

実は、俺こと黒川 慎吾は、生まれも育ちも渋谷なのだ。  
が、7年前に隕石が地球に飛来すると言つ情報が入り、俺とお袋は渋谷を離れ、避難を余儀なくされたのだ。

親父は、

「此処に残る！」

との言つてんばかりで、隕石に巻き込まれて他界。  
俺は今でもそんな親父を憎んでいる・・・。  
と、俺は過去を振り返っていた・・・。

俺が此処で一人佇んでいると、一人の男が俺の所にやつて來た。

「君が黒川君だね？」

と、男は言つ。

「そうだけど？」

俺は男にそう言つた。

男は俺に、

「君、ワームだよね？」

と、聞く。

「そうだが？」

俺がそう答えると、

「君、僕たちの仲間に入らない？」

と、男が誘つて來た。

「何の仲間？」

と、俺は聞く。

「人類ワーム化計画さ。今入れば君に世界の大半を明け渡してあげるよ。

まあ、いやと言つても無理矢理入れるんだけどね。」

人類ワーム化計画・・・地球征服か。

「断る。」

「そう来ると思つたよ。」

男がそう言つと、数体のサナギワームがやつて来て俺を取り囲んだ。

「言つたでしょ？無理矢理でも入れると。

お前もワームなら我々の仲間に入れ。」

男がそう言つと、俺を囲んでいたワームが一斉に飛び掛かつて捕まえ、俺を廃墟と化しているビルへと連れて行った。

ビルの中は、瓦礫で足場が殆ど無く、上に上がる為の階段も崩れていった。勿論、エレベーターも壊れている。

「な！何なんだよ此処は！？」

俺がそう言つと、

「我々ワームのすみかで御座います。」

と、男が言つた。

「お、俺をこんな所に連れてきて、何をするつもりだ？」

「言つた筈ですよ。仲間になつて貰つとね。」

あ、逃げ出そなんて莫迦な事は考へない事です。」

「逃げ出そとすとどうなる？」

俺は男に聞いてみた。

男は、

「連れ戻します。」

と、答えた。

仕方ない。此処は様子を見よう。

「で、あんたらは俺に何をしろと？」

「おや。我々の仲間になつてくれるのですか？」

と、男。

「俺は資格者である前にワームだ。お前達に手を貸してやる。」

と、俺は言つた。

ふつ。此処でわざと仲間になつた振りをして潰してやる。

「それでは、貴方には我々ワームのチームリーダーになつて貰います。」

「リーダー？俺が？」

「貴方は我々ワームが住んでいた星を治める偉大なる王。貴方がいなくては始まりません。」

と、男。

「王？」

「はい。」

「何故王？」

「お忘れですか？貴方の任務を？」

「任務・・・何のことだ？」

「貴方は地球より遙か離れた遠い星の王。」

貴方はそこで、我々の住んでいた惑星ビートルを治めていました。しかし、7年前に惑星が壊滅の危機に見舞われ、惑星から脱出する事を余儀なくされました。

そして、我々ワームは、宇宙船で惑星と待機が似ているこの星に降り立つたのです。

だが、この星には既に生命が誕生していた。

そこで、我々ワームはその生命に成りすまし、この星を乗つ取ると言つ計画を立てた。

当然、計画を立てた貴方なら覚えていらっしゃいますよね？」

俺がワームの王で地球征服計画を企てた。そんな馬鹿な話しがあるか。

が、事実俺はワームだ。コイツの言つている事は本当なのだろうか？

そう思った時、俺の脳裏に鮮明な映像が浮かんだ。

そこは7年前の渋谷だった。

「ビートル王。」

と、蠅をモチーフにしたワーム（レジストコード・フライワーム）<sup>レジストコード・フライワーム</sup>が、カブトムシをモチーフにした俺を呼んだ。

「どうした？」

俺はそいつに聞く。

そいつは、

「IJの星に生命反応があります。」

と、答えた。

「生命反応？」

「ええ。」

「どんな奴らなのだ？」

「我々の様に力は無いが、とても頭が良く、我々と同じ言葉を喋り、我々と同様に村や町を作つて住んでいます。」

「ほお。それはとても良い環境だ。よし、IJの星を征服する。

フライ（ワームの名前）、大至急部下を集めろ。作戦会議だ。」

俺はフライに命令をすると、

「了解！」

と、フライは言つて、部下に召集を掛けに行つた。

それから暫くして、フライが5体の部下を連れてきた。

「おい。これだけなのか？」

「申し訳ありません。

他の者は、この星の連中に殺され、この5人しか残つておりません。

「フライ、どうこう事だ？」

俺はフライに聞いた。

するとフライは、

「NECITEとか言つ秘密組織が、次々に他の部下共を抹殺して行つてます。」

と、報告をした。

「宇宙人と対決か。面白い。

奴らが何処まで着いて来れるか試してやる。じやないか。」

と、俺は言つた。

「王。あれをやる氣ですか？」

「ああ。先ず手始めに誰かを殺し、そいつに擬態する。

それでも黙田なら最終手段として、身に付けて間もないアレを使つ。

「俺はフライに言つ。

フライは、

「アレつて、クロックアップですか？」

と、聞く。

「そうだ。」

「でも。奴らも身に付けているかもしませんよ？」

「その時はその時だ。」

と、俺はフライに言つた。

映像はそこで終わり、

「そう言えば、そんな事もあつたっけな。」

と、俺は呟く。

「それから7年後の事、覚えていりますか？」

男は俺に聞いた。

「覚えている。NECTとか言つ秘密組織が、マスクドライダーシステムとか言つ武装システムを完成させたんだ。」

「その通りで御座います。」

と、男。

「そして、クロックアップを使って俺達に対抗した。その結果・・・

つ！」

俺が話しう途中で止めると、

「どうしました！？」

と、男が聞く。

「俺・・・黒川 慎吾に擬態してから、マスクドライダーシステムを使って、繁殖をし続ける部下共を次々に抹殺してゐる。そんな俺に、チームリーダーが務まるか？」

と、男に言った。

すると男は、

「大丈夫ですよ。NECTを潰せば何もかも終わりますって。」

と、言った。

ZEECTを潰す・・・か。そんな事したら、岬や加賀美、真理はどうなるんだろうか？

俺は悩んだ。

男はそんな俺に対し、

「王、何を悩んでいらっしゃるんですか？」

と、聞いた。

「ああ。ちょっと、擬態してから出来た友達の事を考えていてな。と、俺は答える。

「駄目ですよ。敵に特別な感情を抱いちゃ。お父上が仰つておられませんでしたか？」

敵に女がいても恋をするな。恋をしたら負けだつて。」

「だったら俺はもう負けだ。俺が擬態した人間には好きな人がいるからな。」

と、男に言ったが、

「でもそれって、擬態した人間の感情であつて、自分の感情では無いですよね。」

と、男は突っ込む。

「それもそうか。

所で、誰！？」

と、俺は男に聞く。

「あ、擬態してて気付きました？」

そう言って、男はワームに姿を変えた。

「フライ・・・」

俺はそいつを見て呟いた。

「覚えていてくれましたか。」

と、フライワーム。

「俺がお前を忘れる訳が無いだろ。」

と、俺は言った。

「そうですね。私達、友達ですもんね。」

と、フライワーム。

先に言つておくが、コイツは雄ではなくて雌だ。

「フライ……。」

「何ですか?」「

「俺とお前が友達になつたのつて……あの時、だつたよな。ほら、お前……スタッグ(クワガタをモチーフにしたワームで、レジストコードはスタッグビートルワーム)に虜められてたろ。」そうやつて俺が昔話を始めると、カブトゼクターが俺の元へ飛んできた。

やれやれ……。

「ごめんな……フライ。」

俺はそう言つて、廃ビルを飛び出し、ゼクターと共に現場へ向かつた。

現場に着くと、真理がワームに襲われていた。ワームはクワガタをモチーフにしており、俺はそいつがスタッグであると直ぐに気付いた。俺はそいつの前まで行き、

「虜めてんじやねえよ。」

と、言つた。

スタッグは、

「生身で俺とやるうつてののか?」

と、聞く。

俺はスタッグに、

「昔と変わつてないな。」

と、言つてやつた。

すると真理が、

「慎吾、ワームに知り合い?」

と、聞いてくる。

が、スタッグは、

「人間に知り合いなどいない!」

と言つて、俺をどかして真理に襲いかかつた。

「待て。お前の相手は俺がやる。」

「俺はスタッグに喧嘩を売つた。」

「何！人間のお前が？」

「ふつ、俺を人間だと思って甘く見ると痛い目を見るぞ。」

最も、今の俺を相手にしたら、痛い目では済まされないがな。」

そう言つて俺は、カブトに変身をした。

「スタッグ・・・これが俺とお前の、最後の戦いだ。本氣で来い。」

「俺がスタッグにそう言つと、

「貴様、何故俺の名を知つている！？」

と、スタッグが驚いて言つた。

「無駄口を叩いてる暇があつたらさつさと来いや！」

俺はそう言つて、スタッグを思い切り殴りつけた。

「貴様・・・。」

スタッグはそう咳き、俺に反撃をする。

が、俺はそれを巧くかわした。

「そ、そのかわし方！？」

「どうした？」

「俺は知つてゐる。お前、ビートルだな。」

と、スタッグ。

「どうやら氣付いた様だな。」

「貴様、何故人間の味方を！？」

それに、人間を殺して擬態し、この星を乗つ取るのがお前の役目だつたろ。」

「変わつたんだ。俺は生まれ変わつたんだよ・・・人間にな。

どうだ、この際お前も心入れ替えて地球を守らないか？楽しいぜ、正義の味方つて奴は。」

俺はスタッグにそう言つた。

しかしスタッグは、

「嫌だね。」

と言つて、攻撃をして來た。

が、俺はまたもやそれを避けた。

「お前のは威力はあるが、スピードがいまいちだ。」

「おのれー！覚えてろよー！」

そう言つてスタッグは、クロックアップをして逃げて行つた。

「追わないの？」

真理はそう言つた。

「追わない・・・俺は、あいつが強くなつて帰つて来るのを待つて  
るんだ。だから、それまであいつは・・・。」

俺はそう言つて、変身を解くと、その場を去つて家路に着いた。

## 第9話・友達（後書き）

何なんだろ？・・・この結末。

## 第10話・ガタック誕生

東京都上野・・・。

此処で、一人の男が事件の被害者を調べていた。

男の名は、加賀美 新。

彼は、ワームに対抗すべく人類が結成した秘密組織「ZECT」の隊員である。

加賀美が遺体を調べていると、

「加賀美君。」

と、女性が声を掛けた。

女性の名は、岬 結月。

彼女もまた、彼と同様にZECTの隊員である。

そしてもう一人、この物語が進行する上で重要な人物が、高校生である主人公のこの俺、鍬形くわがた総そう一様だ。

「あ、岬さん。」

と、加賀美。

「加賀美君、帰るわよ。」

「はい。」

二人は、遺体を処理すると、家路に着いた。

翌朝、彼らは出勤をする。

「お前達、今日の仕事、分かつてるな？」

と、田所が言う。

「廃工場に逃げ込んだワームの殲滅。」

と、岬が言った。

「その通りだ。じゃあ行くぞ。」

田所はそう言って、墨田区八広の廃工場へと車を発車させた。

八広の廃工場に着くと、加賀美と岬はワーム殲滅の為に準備をする。

一方、主人公の俺様は、八広の廃工場に忍び込んで遊んでいた。

すると、最近世間を賑かしている、ワームとか言う奴と戦つてゐ

人の人物を見かけた。

俺は暫くの間、そいつらの様子を見る事にした。

「しまった、もう弾が！」

加賀美は、弾を切らしてしまった。

「こっちもよ！」

岬も同様だった。

「俺、やってみます！」

「分かつたわ。早く戻つて来てちょうだい！」

「はい！」

加賀美は、そう返事をすると、持ち場を離れて車に戻つた。

「どうした加賀美！？」

田所が聞く。

「ベルト、取りに来たんです。」

「そうか。ならその箱を開ける。」

田所は、加賀美の横にある箱を開ける様指示した。

加賀美はその箱を開けると、

「これがベルト……。」

と、呟いた。

「何をしている？さつさと行け！」

田所は加賀美にそう言つた。

加賀美は、車を出ると、急いで持ち場に戻つた。

加賀美が戻つて来ると、岬はワームに捕まつていた。

「岬さん！？」

加賀美が叫ぶと、ワームはそれに気付き、岬を放した。

「良くも岬さんを！」

加賀美はそう言つて、ベルトを腰に装着し、

「来い！ガタックゼクター！」

と、右手を挙げながら叫んだ。

すると、クワガタの格好をした青い何かが空から飛んで来て、加賀美の前までやつて來た。

加賀美は、それを掴もうとしたが、青いクワガタに避けられて掴み損ねてしまった。

加賀美を避けたクワガタは、方向を変えて俺の所へ飛んでくる。

俺はそれを掴み、

「選ばれし者は、俺だ！」

と、言つて、

「変身。」

と、言いながらさいつを腰のベルトに装着し、

「変身」

と、言う機械音を鳴らしてクワガタがモチーフのマスクドライダーに変身をした。

変身が完了すると、

「chan go!-」

と、機械音が鳴る。

俺の存在に気付いたワームは、脱皮をしてサナギワームから成虫ワームへと進化を遂げた。

成虫へと進化したワームは、肉眼では捕らえられない超高速移動能力・クロツクアップをし、俺に近付いて來た。

俺は、キャストオフをすると、直ぐにクロツクアップした。

クロツクアップした俺は、迫つてくるワームにガタツクダブルカリバーで攻撃し、怯んだ隙にライダー・キックをお見舞い。

ライダー・キックを受けたワームはその場で爆発を起こして消滅した。成虫ワームを倒した俺は、クロツクアップを解除して変身を解いた。それと同時に腰のベルトに装着されていた青いクワガタは、どこかへと飛び去つて行つた。

「何なんだお前？」

と、俺に聞く加賀美。

「選ばれし者だ。」

俺はそう言つて、去つて行く。

「待つて！」

と、岬 結月。

だが、俺は岬が止めるのを無視し、その場から立ち去った。

第10話・ガタック誕生（後書き）

い、これって……。

## 第11話・カブト&amp;ガタック

ビストロ・ラ・サル。

俺こと黒川 慎吾は、此処でアルバイトをしている。  
「黒川。 良かつたな、後輩が出来るぞ。」「

と、ひよりが言う。

「後輩?新しいの入つて来るのか?」「

「ああ。と言づかもう来ている。」「

と、ひより。

「もう来てる?」「

俺が聞くと、ひよりは客席を指さした。

俺が見ると、客席を綺麗に拭いている男がいた。

「彼奴は・・・」「

「知ってるのか?」「

「鍵形 総一。俺の中学の時の知り合いだ。」「俺はひよりにそう言った後、

「鍵形、久しぶりだな。」「

と、鍵形に声を掛けた。

鍵形は俺の声に気付くと、

「お前、誰?」「

と、言づ。

「何だお前。この俺様を忘れたのか?」「

「黒川か?」「

「思い出したか。

で、お前が新入りだつたとはな。少々驚きだ。」「

と、俺は言った。

「お前が先輩だつたとはな。少々驚きだ。」「

と、鍵形。

「どうでも良いが鍵形。俺はお前の先輩だ。敬意を払え。」「

「ならお前も俺に敬意を払え。」

と、鍬形。

「コイツ・・・。」

「鍬形、随分と傲岸不遜な態度を取る奴だなお前。」

「何を言つてんだお前は？俺は世界一だ。」

と、鍬形。

「待て。世界一は俺だ。」

「いや、俺だ。」

「俺だ。」

「俺だ。」

「俺様だ。」

「俺様だ。」

「お前だ。」

「いや、世界一はお前だ。」

と、鍬形。

「ほお。認めたか。」

「いや、今のは言い間違いだ。」

と、そこへ、

「お前らしい加減にしろ。」

と、ひよつ。

「そうだぞ黒川。ほら、日下部先輩に謝れ。」

出た、ツンデレ症候群。

「鍬形。お前もだ。」

と、ひよつ。

「すいませんでした。」

そう言つて、鍬形は頭を下げた。  
やつてらんねー。」

そう思つた俺は、

「帰る！」

と言つて、サルを出た。

とは言つたものの、行く宛なんて無いんだよな。

俺はそんな事を考えながら都内を歩き回っていた。

すると、一匹の成虫ワームが人を襲つてゐるのを発見した。

「待て。お前の相手は俺だ。」

俺がワームにそつ言つと、ワームはいきなり俺を攻撃して吹つ飛ばした。

「威勢が良いじゃねえか。」

俺がそう言つて、ゼクターを呼ぼうとした時、

「何だ。黒川か。」

と、鍬形がやつて來た。

「鍬形・・・。」

「助けてやるから逃げる。」

鍬形がそつ言つと、空から鍬形を日掛けてクワガタの格好をしたゼクターが飛んできた。

鍬形はそれを掴むと、

「変身。」

と言つて、ゼクターを腰のベルトにセツトしてマスクドライダーに変身をした。

「成る程。だが俺に助けはいらない。」

俺はそう言つて、カブトゼクターを呼んで変身をした。

変身した俺は、カブトクナイガンでワームを瞬殺。すると鍬形は、

「お前・・・カブトだったのか。」

と、言つた。

「そう言つお前は何だ?」

「ガタックだ。」

そう言つと、鍬形は変身を解き、その場から去つて言つてしまつた。それを見送つた俺は変身を解き、家路に着いた。これから面白くなりそうだ。

第11話・カブト&amp;ガタック（後書き）

鍬形君、慎吾と同じ性格ですね。

## 第12話・フライワームの野望

東京都渋谷区某所。

物語のヒロインである私ことフライは、此処で一人ぼんやりと立っていた。

「ビートル様……一体何処へ？」

と、私は呟く。

すると、一匹のサナギワームが氣絶した人間の女の子を連れて來た。女の子は篠原 愛美にそっくりだつた。

「「」苦労様。」

私はサナギワームにそう言つた。

それから暫くすると、女の子が目を覚ました。

女の子は起きあがり、私の存在に気付くと、怯えながら後ずさりを始めた。

私は女の子に、

「逃げなくて良いのよ。」

と、言つた。

女の子は、

「嫌……来ないで！」

と、怒鳴つた。

私は怒鳴る女の子に、

「嫌だと言つたらどうする？」

と、聞いた。

すると、女の子は小型の機械を取り出した。地球人は携帯電話つて呼んでたつけ。

「そんな物でどうするのかしら？」

私は女の子に聞いた。

「慎吾に。慎吾に電話を掛けるわ。」

「ふうん。慎吾ってのは、貴方のお友達かしら？」

でも残念ね。お友達が貴方の笑顔を見れないなんてね。

貴方はね、一度死んで私の中で生きて行くのよ。」

と、私は女の子に言った。

「そ、その前に慎吾が来て貴方を倒してくれるわ！ 慎吾は、慎吾は  
とっても強いんだから！」

と、女の子は言う。

「へえ。じゃあ、そうされる前に貴方の手でお友達を殺すと言つの  
はどうかしら。」

そう言って、私は目の前の女の子に擬態した。

その瞬間、女の子の全てが私に流れ込んだ。

名前、霧島 真理。高校生。

真理には黒川 慎吾と言つ好きな人がいる。

その人は世界一強く、世間を脅かしているワームと言つ怪物にも負  
けた事が無い。

おまけに、怪物と戦つている時の彼は滅茶苦茶格好いい。

真理は、そんな彼が世界一大好きなのだ。

私は、その記憶に違和感を感じた……。

私は女の子に、

「貴方の大好きな慎吾つて言う人……ワームに負けた事が無いつ  
てどういう事？」

と、質問を投げつけた……。

女の子は驚きながら、

「人の記憶。読みとれるくらいならその事も読みとつてみなさいよ。

」  
と言つて答えなかつた。

良いわ。記憶の奥深くまで探つてあげるわ。

私は、真理の記憶の奥深くまで探つた。

すると、慎吾と言つ男について刻まれた記憶を発見した。  
成る程……慎吾はマスクドライダー カブトなのね。  
え？ マスクドライダーですつて！ ？

ちよ、ちよつとそれつて、ビートル様の事では！？

これはチャンスかも。

そう思つた私は、

「貴方、慎吾と仲が良いみたいね。」

と、女の子に聞いた。

すると女の子は、

「ワームの分際で氣安く慎吾を呼び捨てしないでちよつだい！」

と、言つた。

む、ムカ付く！

「貴方ね、人間の分際でビートル様と仲良くしてんじゃないわよ！  
こうなつたら、彼に近づくため、貴方を殺すしか無いみたいね。」

そう言つて、私はワームに姿を変えると、真理の首を掴んで持ち上げた。

「ぐ、ぐる、じい、お、る、じで。」

と、真理。

「誰が降ろすもんですか！」

あ、な、だ、な、ん、の、も、く、できがあ、つで？

「目的？貴方の大好きな慎吾に近づく為。そして、慎吾を私だけの  
物にする為。

人間の貴方には勿体ない。だから、貴方を此処で殺し、私が貴方に  
なるわ。」

そう言つて、私は真理の首の骨を碎いてトドメを刺した。

すると、真理は氣を失つたかの様にぐつたりして動かなくなつた。  
私は真理が死んだのを確認すると、真理の首を放して下に落とし、  
真理に擬態をした。

「これで、これで良かつたのよ・・・。」

真理に擬態した私はそう呟いた。  
ビートル様、待つて下さいね。

このフライ・・・いや、真理が貴方を必ず私の物にしますから。

## 第1-2話・フライワームの野望（後書き）

愛する者の為に人を殺す・・・。

これが人間だつたらあるまじき行為ですな。

それにもしても、女の子って何をするか解らないから怖いですね。  
でも、作者はそんな子が好きだつたりするんですね。（え？

## 第13話・カブトvsライワーム

俺こと黒川 慎吾は今、自分の部屋にいる。俺はそこで、今月号の格闘雑誌を読んでいた。

すると、俺の携帯がメールを着信した。

俺は、携帯を取るとメールを確認。

メールは、真理からだつた。

何々・・・。

「助けて。渋谷に・・・。」

ほお。真理の奴、渋谷に・・・。

つて、渋谷！？

あそこは7年前から封鎖されている。それなのにどうして！？

と、兎に角、渋谷に行つてみよう。

きっと、真理に何かあつたんだ！

俺は急いで支度をし、自宅を出るとカブトエクステンダーにまたがつて渋谷を目指した。

途中、ワームが人を襲つていたが、相手なんかして暇は無い。急がないと真理が危険なのだ。

俺が焦つてスピードを出していると、後ろからパトカーがサイレンを鳴らして追いかけて来た。

「そのバイク止まりなさい。」

と、パトカーのスピーカーから聞こえる。

嫌なこつた。

俺はカブトゼクターを呼び、カブトに変身すると、瞬時にキャストオフをした。

「残念だが、此処でお別れだ。」

そう呟き、俺はクロックアップをした。

すると、カブトエクステンダーがクロックアップに同調し、猛スピードで町中を駆け抜ける。

そして、よつやく渋谷に到着した。

俺はエクステンダーを止めると、エクステンダーを降りて変身を解き、封鎖されている渋谷へと入つて行く。

渋谷は、瓦礫以外何も無かつた。それも、7年前に墜落した宇宙船のおかげだ。

「本当にこんな所に？」

と、俺は独り言を呟つ。

俺は、暫くの間歩き続けた。

が、じう瓦礫だらけじゃ何が何だか分からぬ。

それでも俺は真理を捜し続けた。

それから暫くすると、何やら怒鳴り声が近くから聞こえた。

俺は、それを確かめるべく、所々残っている壁を盾に、その怒鳴り声がする所を確認した。

するとそこには、一匹のワームが女の子の首を掴んで持ち上げていた。

俺はその女の子が真理である事に気付いた。

「真理・・・。」

俺がそう呟くと、真理はぐつたりした。

どうしたのだろうか？

俺は、ワームに気付かれない様に近づいて真理の安否を確認した。

真理は死んでいた・・・。

俺がワームに顔を向けると、ワームは真理に擬態する。

「これで、これで良かったのよ・・・。」

と、真理に擬態したワーム。

「良くねえな。」

と、俺はワームに向かつて呟つ。

真理に擬態したワームは俺の声に反応して振り向き、

「あ、慎吾じやない。」

と、言つた。

「ワーム如きが気安く俺を呼ぶんじゃねえよ。」

「な、何言つてゐるの慎吾？ワームつて何？」

「惚けてんじやねえよ。」

そう言つて、俺は倒れてる真理を指さした。

「俺は見てた。お前が真理の首の骨を碎いてトドメを刺した所を。

俺がそつ言つと、擬態したワームは元の姿に戻つた。

その姿は、フライワームだつた。

「ふ、フライ……。お前だつたのか。」

「問題でもありますか？」

「ふイツ・・・自覚無いな。

「大有りだ。お前は俺の大事な友を殺した。それの何処が問題じやないつて言つんだ。」

「あ、あればビートル様の為を思つて。」

「俺の為？いや、違うな。」

「何が違うんですか？」

私は、7年前にビートル様が命令した通りに人を殺して擬態しただけですよ。」

この時、俺の堪忍袋の緒が切れた。

「許さねえ。絶対に許さねえ。」

「び、ビートル様？何をそんなに怒つていらつしやるんですか？」

「俺が怒つてんじやねえ。俺の中の慎吾が怒つてんだ！」

俺がフライに言つと、カブトゼクターが俺の元へとやつて來た。

「な、何をなさるおつもりですか！？」

「お前を・・・殺すんだよ！」

そう言つて、俺はゼクターを掴んだ。

「変身！」

そう言つて、俺はゼクターをベルトにセットし、

「HENSHIN!（変身！）」

の機械音と共にカブト・マスクドフォームに変身をした。

「どうしてもやると言つのですか・・・。それなら私も容赦しません。」

そう言つと、フライワームはクロックアップをした。

「俺から逃げられると思うなよ。」

俺はそう言つて、ゼクターホーンを起こし、エネルギーをチャージさせ、

「キヤストオフ。」

と言つて、ゼクターホーンを完全に倒す。

すると、

「cast off.」

の機械音と共にアーマーが弾け飛び、ライダーフォームへの移行が完了すると、

「change beetle.」

と言つ機械音が鳴つた。

「クロックアップ。」

俺はそう言つと、

「clock up.」

の機械音を発してクロックアップをした。

クロックアップした俺は、フライワームに近づいて、

「こいつは・・・真理の分だ！」

と言つて、思い切り殴りつける。

だが、フライワームは素早くそれを手で受け止めた。

「ビートル様。早さでは私の方が上ですよ。

マラソン大会で私に勝つた事がありますか？」

「ならこれでどうだ？」

と、俺はカブトクナイガン・アックスモードをパンチを止めている

フライワームの腕に振り下ろした。

フライワームはそれに気付くと、素早く手を引っ込めた。

「危ないわね！」

そう言つと、フライワームはもの凄いスピードでラッシュをして來た。

「くつ！」

俺は連續パンチを全て受け、フライワームの攻撃がやむと足下がすくみ、その隙にフライワームが真理のスペシャル回し蹴りを放った。  
これは！？

と思つた俺は、

「ブットオン。」

と言つて、ゼクターホーンをマスクドフォームの位置に倒した。  
すると、

「poo-t oo-（ブットオン。）」

と機械音を鳴らし、装甲を張つて完全に防御。

だが、フライワームはそれに気付かず回し蹴りを叩き込んだが、装甲のお陰で俺は殆どダメージを受けずに済んだ。

「ふつ、真理のスペシャル回し蹴りをやるとは大したもんだ。

だが、お前の負けだ。よく見てみる。」

俺が言うと、フライワームは俺の姿を見て驚いた。

「そんなの・・・卑怯よ。」

「これが戦いつてもんだろうが。」

俺はそう言つて、再びキヤストオフし、

「ワン、ツー、スリー」

と、フルスロットルを順番に押して行き、ゼクターホーンを倒して  
チャージさせた。

「ライダー、キック。」

俺はそう言つて、ゼクターホーンを再度倒してライダー・キックを発動させ、

「ルーアイダー・キック」

の機械音と共に回し蹴りを放つた。

ライダー・キックを受けたフライワームは、大ダメージを受けてその場に倒れた。

かろうじて意識のあるフライワームは、  
「な、何故手加減をなさつたのですか？」  
と、聞いた。

俺はそれに対し、

「出来ない……。お前を殺したら、真理の記憶が消える……。」

と言った。

そう、あの時……。フライワームが回し蹴りをして来た時、俺は真理を感じたのだ。

だから手加減をしてやったのだ。

フライワームは、真理の姿になると、ゆっくり起きあがり、

「慎吾……。」

と、俺を呼ぶ。

「何だ？」

「慎吾……私、平気だよ。ワームになつても……。」

私、ワームの中で生きて行く……。だから、もうやめて。」

それを聞いた俺は変身を解き、真理に擬態したフライワームを抱いた。

にしても、不思議な事だ。

人間の心って……。ワームまでもを操ってしまう……。

俺も慎吾の心に操られているのだろうか。

## 第1-3話・カブト→スカライワーム（後書き）

フライワームにトドメを刺さなかつたカブト。

それは自分もワームだつたから？

それとも、真理に対する情つて奴？

てか、次のネタが浮かばない。

わいはどないすればええねん！？

グサツ！

ワームに変態した俺の腕が真理の背中に突き刺さった。

「ど・・・ど・・・し・・・て？」

そう言つと、真理はフライワームに変態した。

俺は慎吾の幻体を出してこう言つた。

「俺は、ワームを許さない。ワームは俺が全て倒す。」

俺は腕を抜き、慎吾に擬態する。

「今のは真理の分・・・。」

そう言つと、カブトゼクターが飛来し、バツクルへと装着される。

「変身。」

俺はそう呟いた。

「H E N S H I N！」

電子音が鳴り、装甲が身を包んでカブトに変身した。

「キヤストオフ。」

ゼクター ホーンを180°。展開。

「c a s t o f f」

電子音が鳴つてアーマーが吹つ飛び、フライワームを日掛けてもの凄いスピードで飛んでいく。

ダダダダダダ、と連射音を立て、フライワームに全てのアーマーがヒットした。

カブトホーンが起きあがり、

「c h a n g e b e e t l e」

と、電子音を鳴らしてライダーフォームへの移行が完了した。

「c l o c k u p」

サイドバックルを押し、クロックアップを発動した。

「o n e - t w o - t h r e e」

と、フルスロットルを順番に押し、ゼクター ホーンを展開してパワ

ーをチャージ。

「ライダー、キック。」

と、ゼクターホーンを再び展開。

「rider kick

の電子音と共にフライワームに回し蹴りを叩き込んだ。

「clock over

ドーン！

クロックオーバー直後、爆発が起り、煙が発生して視界が遮られる。

やがて、煙が晴れて視界が良くなつてくる。

が、その中に黒い人影が一体、真っ直ぐ立っていた。

そして、完全に煙が晴れると、それがフライワームの姿である事が直ぐに解つた。

「そ、そんな馬鹿な！？」

俺は驚きと共に焦りが生じた。

フライワームは真理の幻体を出し、

「残念でしたあ。」

と、バカにする様に笑いながら言つた。

「うおおおおおお！」

俺は叫び声をあげながらフライワームに猛攻撃を仕掛けに行つた。

シコシコシコシコシコン！

パンチによつて弱風と風音が起きるが、肝心のパンチが一発も当たらない。

「そんなんじや当たりませんよお。」

真理の幻体は、再びバカにする様な口調で言つた。

「ざけんな！」

俺はラリアットをするが、目にも留まらぬ速さで避けられ、背後を取られてしまった。

「お前の力では私を倒す事など出来ない。」

幻体が言つと、フライワームは背中に正拳付きを入れた。

ドカーン！

轟音と共に、強烈な痛みが背中に走る。

「ぐうわー！」

「トドメよー！」

幻体が言つと、フライワームは空高く飛び上がり、俺を頭掛けて急降下した。

ヒュウーン！

飛行機が空を飛ぶのと同じ音がした、と思つと、もの凄い衝撃が上から掛かつた。

ズドーン！

地面に大きなクレーターが出来、俺はその真ん中で空を見上げる様に倒れていた。

ブーン、とゼクターが外れて飛んでいき、俺の身を包むアーマーが粒子に変換され、バツカルへと吸い込まれていった。

ズシ、ズシ、ズシ、ズシ

フライワームが足を引きずらせながら歩いて来た。

俺の前に黒い人影が現れる。次第に、目が慣れると、それがフライワームだと言つのがハツキリ見えた。

「俺の負けだ。やれ・・・。」

俺が言つと、フライワームはトドメを刺そつと構えた。

「Hyper clock up」

どこからか電子音が聞こえ、同時にフライワームが消滅した。

「Hyper clock over」

再び電子音が聞こえた。

コーン、コーン、コーン、コーン

何者かの足音が聞こえ、それが段々と近付いてきた。

そして、ついにそれが俺の前に立つた。

ふと気付くと、そいつの姿はもう無かつた。

一体、何者なのだろうか？

第14話・現る（後書き）

か、カブト・ハイパーフォームの登場か！？

あるトンネルの中。

「ライダー キック。」

「カシャ！」

カブトは、ゼクター ホーンを展開。

「R i d e r k i c k」

カブトは、電子音と共に、迫り来るワームに、回し蹴りを放った。

「ズドーン！」

ワームは緑の血を吹き出し、爆発を起こして霧散した。

「ブーン」

ゼクターが飛んで行き、変身が解ける。

「なあ、天道。」

加賀美が、変身を解いた天道に、声を掛けた。

天道は黙つて振り向く。

「お前つて、ワームを倒す時、躊躇つたりしないのか？例えワームとは言え、擬態した人の記憶を引き継いでいるんだぞ？」

「それがどうした？」

躊躇えばこっちがやられる。

相手がワームなら、俺は非情に徹する。

天道は言い切ると、その場を離れた。

「（何だよ、あいつだつて、ワームじゃん。）」

加賀美は、天道を見送りながら、そう思つた。

その頃、ビストロ・ラ・サルでは、一人の男子高校生が、ひょりと仲良く話をしていた。

「カラーンカラーンカラーン」

扉が開き、天道が入ってきた。

「ひより、何時ものだ。」

そう言つて、天道はひよりに、鯖の味噌煮を要求。

「たまには手伝え。」

ひよりは、そう言いつつ、天道と調理場へ入つて行つた。

「（何だ、あいつ？

ひよりと仲良くしやがつて。）」

それを見ていた、男子高校生が思つた。

気が落ち着かない男子高校生は、ビストロ・ラ・サルを出でていつた。

「そのくらいの腕があるんだ。

そろそろ、メニューに出してみたらどうだ？」

天道はひよりに聞く。

「弓子さんにも同じ事を言われた。」

ひよりは笑顔で言った。

「ボク、やってみる。」

「よし、ひよりシェフの誕生を祝つてパーティをしよう。仕事が終わつたら家に来い。」

天道はそう言い残すと、ビストロ・ラ・サルを出でていつた。

その頃、先ほどの男子高校生が、ワームに遭遇していた。

「邪魔だ、俺の視界から消えろ。」

男子高校生は、ワームに言った。

が、聞き入れては貰えず、問答無用で襲い掛かつてきた。

が、カブトゼクターが飛来し、男子高校生を攻撃から守つた。

男子高校生は、ゼクターを掴み、バツクルにセツトした。

「変身！」

男子高校生は叫ぶ。

「ヘンシン！」

電子音が鳴り、男子高校生はカブト・マスクドフォームに変身した。

突然、ワームが爆発を起こした。

カブトは、突然の出来事に驚いた。

いや、驚くのはまだ早い。

何と、煙の中から、別のワームが姿を現したのだ。

そのワームは、カブト・ライダーフォームと瓜二つだった。  
差し詰め、カスクワーム、と言つた所か。

「（ワームが、ワームを！？）」

カブトは更に驚いた。

カスクワームは、振り向くと、そのまま去ろうとした。  
が、落ち着きを取り戻したカブトが、カスクワームに襲い掛かった。

「（んっ！？）」

カスクワームは、それに気付くと、直ぐに避けて反撃に出た。

「何のつもりだ？」

カスクワームの横に、天道の幻体が現れて言った。

「ほお、そう言う事か。」

そう呟いたカブトは、キャストオフをし、カブト・ライダーフォームに移行した。

そして、カスクワームに接近し、連續パンチをくりだした。

カスクワームは怯み、後ろに下がつて行く。

「ひよりに近付いたら、俺が許さない！」

カブトは、そう言いながら、カスクワームを追い込んで行く。  
「貴様、ひよりの何だ！？」

カスクワームは聞く。

「お前が知る事では無い！」

そう言って、カブトはフルスロットルに手を掛けた。

「o n e - t w o - t h r e e」

「カシャヤ！」

カブトホーンを展開するカブト。

「これでおしまいだ！」

ライダー・キック！

「カシャヤ！」

「R i d e r   k i c k」

カブトは、カスクワームに回し蹴りを放つた。

「ズドーン！」

カスクワームは爆発を起こし、木つ端微塵になつた。そう思われた。が、煙の中に黒い影が立つてているのが見える。

カブトはそれを見つめる。

やがて、煙が晴れると、無傷のカスクワームが姿を現した。

「そんな、馬鹿な！？」

カブトは驚いた。

カスクワームはその隙に、カブトを攻撃して立場を逆転させる。「やつぱりお婆ちゃんの言つた通りだ。

俺が望みさえすれば、運命は絶えず俺に味方する！」

カスクワームはそう言つて、怯んだカブトにトドメを刺した。

カブトの腹に、カスクワームの鉄拳が見事に決まった。

「ぐつ！？」

カブトは力が抜け、腹を下にして倒れた。

「ブーン」

カブトゼクターが飛び去り、変身が解けた。

カブトをのしたカスクワームは、天道に擬態する。

「死ぬほど痛いか？」

天道は聞いた。

「クソツ！」

男子高校生は、叫ぶと立ち上がつた。

「ほう、まだ立てるのか？」

「俺は、お前を倒すまで、死なない！」

「ブーン」

再びカブトゼクターが飛来。

男子高校生はそれを掴もうと、手を伸ばした。

が、カブトゼクターは避け、天道へと向かつて行く。

天道は飛来したゼクターを掴む。

「ふざけるなあ！」

男子高校生は、カブトムシをモチーフにしたワームに変態した。差し詰め、ビートルワーム、ってところか。

「貴様！？」

天道は驚いた。

そんな天道に、ビートルワームは容赦無く襲い掛かる。

天道はヒヨイツと避けた。

「相変わらずだな、ビートルワーム。」

天道が口を開いた。

「貴様、俺を知つてゐるのか？」

男子高校生の幻体が現れて言つた。

「何を言つてゐるんだ？俺とお前は、血を分けた兄弟だろ？」

天道の言葉に、ビートルワームは驚いた。

第15話・兄弟（後書き）

スランプに陥りました。

勝手で申し訳ありませんが、打ち切りにします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7280a/>

---

仮面ライダーカブト TIME PARADOX

2010年10月10日03時50分発行